

戦後ブラジル移民の宗教意識※

島 久 洋

日系ブラジル人におけるエスニック・アイデンティティー (ethnic identity) を論じた前山 (1984) は、エスニシティ (ethnicity) の明確な定義を避けながらも次のように述べている。

日本の日本人が日本本土に住みつづけている限りにおいて、ある種のエスニシティを構成していたかどうか、日本は単一人種社会 (または単一民族社会) なのかどうかは一概に断定しがたいが、一応ここではエスニシティを構成してはいなかったと見ておこう。明治の末から太平洋戦争開始の時期までに約19万人の日本人がブラジルに移民として渡航したが、かれらのほとんどは日本にいる限りでは、その日常生活において他人種との接触を、直接的・持続的・集団的に頻繁に体験していたわけではなかったし、周囲の人間をエスニシティによって分類していたわけではなかった。「日本人」であるというアイデンティティーは日本全体を外国に対峙させたときに発動させられるごく特殊なレベルでのものであって、すなわち「国家」が介入してきて初めて成立するもので、庶民が日常生活において周囲の人間と社会的相互作用 (social interaction) をもつときには特に重要な役割を果たすアイデンティティーではなかった。「日本人」とはナショナル・アイデンティティーであり、庶民は次第に国家の要請と強要によって天皇に結びつけられ、国民にされてはきていたが、日本人アイデンティティーはかれらの核を構成していたわけではなかった (前山, 1984, p. 447)。

※本報告は、1990年7月下旬からおよそ1ヶ月間にわたる家森幸男教授 (島根医大) のWHO CARDIAC study 国際共同研究ブラジル調査団に同行し、実施した調査に基づいている。同教授と奈良安雄博士にはとりわけお世話になった。また、ブラジルでの現地調査では、南リオグランデ・カトリック大学老年医学研究所長森口幸雄教授に大変お世話になった。ここに記して感謝する。

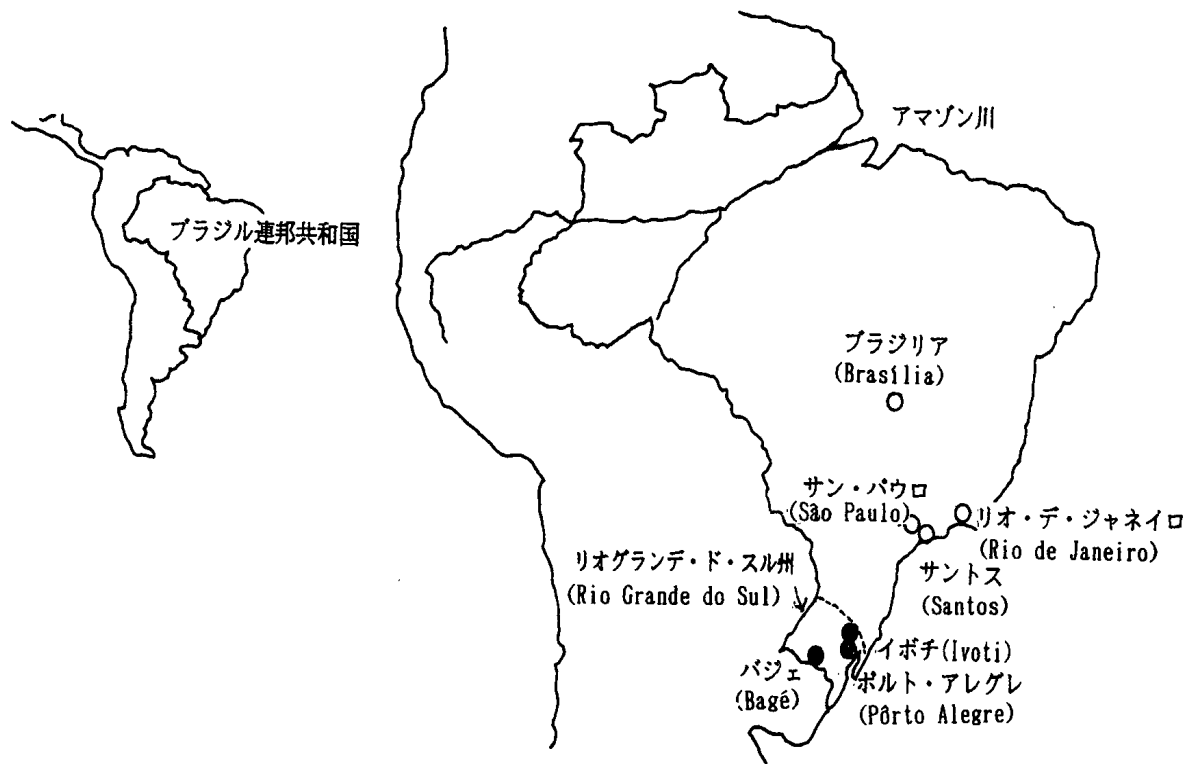
ブラジルでの現地調査の基本的目的は、移民、とくに戦後移民一世が文化的断絶と言語的断絶とを如何に克服していったかという課程を考察することである。換言すれば、文化的風土の全く異なる社会への適応課程を分析考察することである。この小論もその研究の一環であり、ここでは彼らの宗教意識の変遷を通して彼らの適応課程を考察することにする。

ブラジルは日常生活の中にカトリック教が深く浸透している国である。そこへ、カトリック教とはほとんど縁のない日本文化の中で生まれ、育ち、成人して、しかもポルトガル語をうまく話せない人々が、移民として移り住むのである。このような移民一世の人々は、文化的風土が全く異なる土地で文化的自己が崩壊した場合、新しい文化的自己をどのようにして再構築していくのだろうか。あるいは、文化的自己が再確立できず、文化的自己が崩壊した中でどのような生活を続けていくのだろうか。または、日本文化の中で形成された文化的自己は、決して崩壊することがないのだろうか。

ブラジルは、日本からみればちょうど地球の裏側にあたり、日本とブラジルとの間には、三つの大きな正反対の違いがある。まず第一に、北半球と南半球との違いである。次に、12時間の時間差である。さらに、季節も逆である。日本が夏の時は、ブラジルは冬である。

1. 戦後移民森口教授の述懐

日本の敗戦で終了した第二次世界対戦後、慶応義塾大学医学部教授の職を辞し、移民としてブラジル連邦共和国 (Federative Republic of Brazil) へ渡り、西アルゼンチン (Argentina Republic)、南にウルグァイ (Oriental Republic of Uruguay) と国境を接するブラジル最南端のリオグランデ・ド・スル (Rio Grande do Sul) 州の州都である、人口約 120 万人のポルト・アルグレ (Pôrto Alegre) にある南リオグランデ・カトリック大学老年医学研究所長を現在しておられる森口幸雄教授のお話から始めよう。なお、同教授は、敬虔なカトリック教徒である。



注：●印の3地域で実施調査を行った

図1 ブラジル連邦共和国の地図

ブラジルでの現地調査の打ち合わせのために来日しておられた同教授と話し合う機会があった。1989年11月13日（月）のことであり、場所は神戸のポートピアホテルであった。

『私は現在、日本政府（JICA）の援助にも助けられ、毎年夏にリオグランデ・ド・スル州の四千キロメートルにも及ぶ地域に散在する日系移民居住地を巡回医療しております。この州の日系移民は、ほとんどが戦後ブラジルへ移住した人々であり、現在23ヶ所に約450名の日本人が、主として各種の農業に従事しています。これらの人々は、移民一世がほとんどであり、5，60歳代の人々が中心であり、現在せいぜい2世までの人々です。私自身が戦後移民だからかも知れませんが、これらの戦後移民の心身状態に非常に強い関心を持っています。』

日本移民の実態をいいますと、第二次世界大戦前の日本からの移民は、主にサン・パウロ (Sao Paulo) 周辺への農業移民でした。当時の移民は、農家の人々だけしか許可されませんでした。しかも、東京在住者は移民できなかったのです。そして農家の人々の学歴は小学校だけでした。東京在住者で移民したい人は、学歴を小学校卒と偽り、東京以外の県の農家の養子になって移民したものでした。実態は、小学校卒業の農業棄民といえます。だから、ブラジルでも日本人は学歴的に軽蔑されていました。

私の伯父の一人も戦前にブラジルへ移民として渡航しましたが、東京に住んでいて旧制高等学校を卒業していましたから、小学校卒と学歴を偽って、茨城県の農家の養子になってブラジルへ行きました。

リオグランデ・ド・スル州への戦後移民は、昭和28(1953)年から始まり、昭和32年(1957)年まで続きました。その間、約2千人の人々が来ましたが、学歴的には、最低でも高等学校を卒業しており、60%位の人が大学卒業者です。だから、この州での日本人の評価が高まったのです。リオグランデ・ド・スル州は、ブラジル23州の中で欧米系の人口が一番多い州です。言い換えれば、黒人系の比率が一番低いということです。また、識字率も一番高い州であり、大学在学率が5%で最も高い州でもあります。大学在学率は、ブラジル全土で1%です。

ところで、この州の平均寿命は、日本などよりもかなり低く、この州のドイツ人やイタリア人は、本国の人々よりも約10年早く死にます。また、この州の日本人はもっとひどく、日本在住の日本人よりも約17年早く死んでいます。しかも、死亡者の中で自殺者が異常に多いのです。表面にはできませんが、私の調査では自殺者の多くは農薬自殺です。書類上は、過って農薬を飲んだとなっていますが、本当は自殺なのです。

なぜ、この州の日系移民の中で自殺者が多いのでしょうか。その理由を知りたいのです。

日系人はブラジル社会では少数派です。現在5, 60歳代になっている戦後移民一世は、文化的断絶状態のなかにあり、大変孤独です。また、ポルトガ

ル語が理解し難いという言語的断絶をも味わっているのです。

彼ら移民一世は、キリスト（カトリック）教の簡単な風習を知らないのです。子供たちは学校で習うので知っています。移民一世は、“金がある、ない”というポルトガル語は使えますが、ちょっと抽象的な“経済的状态が悪くなった”というような表現は理解できないし、使えないのです。また彼らは、政治的問題や宗教的問題はわかりません。しかし彼らの子供たちは、カトリックの学校へ行っているのでわかります。親たちは、キリスト教で、神恩を信徒に与える重要な儀式であるサクラメント（sacrament）すらわからないのです。もちろん、七五三やお盆や彼岸に対応するようなカトリックの行事を知らず、そんな知識は全くありません。たとえば、七五三に該当するような初聖体も知りません。ブラジルではこの時、子供達はみんな晴着を着て初聖体を受けます。親たちがそんなことを知らないから、日本人の子供だけは普段のまゝです。だから、日本人の子供は日本人以外の子供たちから孤立します。そこで、彼らは親たちに不信を抱くようになります。

日本人の子供は、学校や友人を通して自然にブラジル文化に同化していきます。しかし、親は違います。

移民一世の親は、子供に数学は教えられても、地理、歴史、そして宗教などはわからないので教えられません。そこから徐々に親子の断絶が始まります。日本文化のなかに育った親とカトリック文化に順応していく子供との文化の違いに基づく親子の断絶です。

移民一世の親は、子供たちのために一生懸命農業に従事していますので、ポルトガル語を勉強したり、子供と対話したりする時間がないのです。

また、ポルトガル語が完全に身につけていないので、日常の何でもない会話がわからないのです。たとえば、私（森口教授）もポルトガル語のテレビドラマがわかりません。ところが、私の子供たちは何の苦もなく楽しそうにそのドラマを見ているのです。他の移民一世はなおさらでしょう。

移民一世を親にもつ子供たちは、親の日本的文化とブラジルの欧風的文化とにおける動作や行動の違いを日常生活のなかで日々経験するのです。私に

言わせれば、日本文化は、“以心伝心”という言葉に代表されるようにスキップを欠いた口先だけのものです。思っていることを行動で表現するのを恥とします。日本人は謙虚の美德を旨としますので、人にものをあげる時、“まずいものですが、どうぞ”と言います。ところがブラジルでは、人にまずいものをあげるのは大変失礼なことなので、そういう表現は絶対にしません。たとえば、ブラジル人は必ず、“一番良い野菜をもってきました”と言います。また、日本人の子供が欧米人の友人の家に遊びに行った時、友人の父親が在宅していると、彼は友人をだいてキスをする。次に、日本人の友をだいてキスをする。日本人の子供が家へ帰っても、親は、“お帰り”とは言っても、だいてキスしてくれない。子供は親に対して、“僕を愛していないのか？友人の父親の方が僕を愛してくれている。”と思うようになるのです。親たちは、言葉がわからないので、文化のサインがわからないのです。移民一世の2,3男は15,6歳になると親元を離れていきます。しばらくすると、青い眼の花嫁を連れて帰ってきます。それを見た親は、寂寞とした寂しさを感じます。また、ブラジル社会では老人が尊重されません。

このように移民一世は、ブラジル社会に適応できず、彼らの子供たちとも断絶しています。それ故かどうかわかりませんが、リオグランデ・ド・スル州の移民一世のなかでは、男女とも農薬自殺が非常に多いのです。この人たちの心理を調査して欲しいと思います。年齢的に考えても、彼らはもう5,60歳代になっていますので、調査の時期としては今が一番良いと思います。この期を逃せばもう調査できないかも知れません。』

ここで、ブラジルへの日本人移住者の推移を簡単に述べておこう。

富野と住田(1990, pp. 164-166.)によれば、ブラジルへの日本移民の歴史は、1908(明治41)年に始まった。サン・パウロ州政府との間の契約により、第一回日本移民として契約移民781名、自由渡航者10名の計791名が笠戸丸で、1908年6月18日にサントスに到着したのである。以後、1934(昭和9)年に移民制限法である「外国移民二分割当法」が新憲法で定められるまで、紆余曲折を経ながら増え続け、1942(昭和17)年に第二次世界大戦に

表1 日本からブラジルへの移住者数：1908～67年（単位：人）

A：ブラジル政府移民局発表の統計，他国からの転入者も含む

B：日本人の調査に基づく統計，日本から直行した者のみ

（富野・住田，1990，p.165 より）

年	A	B	年	A	B
明治			昭和		
1908（41）	930	791	1939（14）	1,414	1,490
1909（42）	31	0	1940（15）	1,268	1,245
1910（43）	948	909	1941（16）	1,548	1,591
1911（44）	29	0	1942（17）	—	—
大正			1943（18）	—	—
1912（1）	2,909	2,972	1944（19）	—	—
1913（2）	7,122	7,049	1945（20）	—	—
1914（3）	3,675	3,785	1946（21）	6	—
1915（4）	65	0	1947（22）	1	—
1916（5）	165	0	1948（23）	1	—
1917（6）	3,899	3,933	1949（24）	4	—
1918（7）	5,599	5,708	1950（25）	33	—
1919（8）	3,022	3,694	1951（26）	106	—
1920（9）	1,013	1,129	1952（27）	261	54
1921（10）	840	776	1953（28）	1,928	1,480
1922（11）	1,225	1,087	1954（29）	3,119	3,524
1923（12）	895	757	1955（30）	4,051	2,659
1924（13）	2,673	2,600	1956（31）	4,912	4,370
1925（14）	6,330	5,900	1957（32）	6,147	5,172
昭和			1958（33）	6,586	6,312
1926（1）	8,407	7,832	1959（34）	7,123	7,041
1927（2）	9,084	8,072	1960（35）	7,746	6,832
1928（3）	11,169	10,252	1961（36）	6,824	5,146
1929（4）	16,648	15,098	1962（37）	3,257	1,830
1930（5）	14,076	12,985	1963（38）	2,124	1,230
1931（6）	5,632	7,061	1964（39）	1,138	751
1932（7）	11,678	11,580	1965（40）	903	531
1933（8）	24,494	24,493	1966（41）	937	785
1934（9）	21,930	21,752	1967（42）	1,070	638
1935（10）	9,611	9,680	1968（43）	597	420
1936（11）	3,306	5,303	計 247,489		
1937（12）	4,557	4,457			
1938（13）	2,524	2,485			

より中断するまでの期間に、約20万人弱の移住者がブラジルへ渡った。戦後、1952（昭和27）年に日本とブラジルとの国交が正常化し、約6万人近くが移住した。表1に示すように、戦前と戦後を通じて約25万人の日本人移住者がブラジルに入国した。

今日では、移住者の子孫を含め、日系人の人口は約80万人にまで増加して

表2 ラテン・アメリカの国別日系人数（1980年10月現在）
（富野・住田，1990，p.165 より）

国名	日系人数	国名	日系人数
ブラジル	797,375	ドミニカ共和国	643
ペルー	69,990	キューバ	611
アルゼンチン	31,271	ウルグアイ	448
メキシコ	10,663	エクアドル	131
ボリヴィア	10,473	グアテマラ	45
パラグアイ	6,631	パナマ	30
チリ	2,215	エルサルバドル	12
コロンビア	947	その他	41
ヴェネズエラ	702	合計	932,228

いる。表2に示してあるように、ラテン・アメリカにおける日系人総数の約85パーセントがブラジルに集中しているのである。

戦後は1953（昭和28）年から61（昭和36）年頃までが全盛期となり、多い年には6,000人から7,000人に達したものの、近年は、日本経済の好況による人手不足とブラジル政府の外国人移住者を制限する政策とによって、渡航者は減少傾向にある。ことに最近では、ブラジル政府は農業移住者にはほとんど門戸を閉ざし、技術移住者のみ入国させるという移住者選別の方針をとっているため、移住者に対してかなり厳しい条件を課すようになっている。

戦前の日本移民の約90パーセントは、コーヒー農園の契約農としてサン・パウロに誘致された農業移民であった。ヴァルガス臨時政府首班の1930年代に、コーヒー生産の衰退を契機として、新しい生産技術による日系人の農業が興ったのである。それは、機械化による棉花や米、蔬菜の大規模経営であった。そして、1935年から40年にかけての棉花景気の衰退などが日系人の他地

表3 ブラジルの農産物に占める日系農家生産の割合（1964～65年度）

（富野・住田，1990，p.166 より）

品 目	全体生産量（トン）	日系農家生産比（％）
コ メ	1,770,288	4.2
ジャガイモ	1,263,812	41.0
大 豆	304,897	5.9
トウモロコシ	9,408,043	2.3
ト マ ト	553,270	58.1
鶏 卵	649,846,000 ダース	43.8
コ ー ヒ ー	2,084,027	8.8
棉 花	1,770,288	13.7
落 花 生	469,641	21.2
茶	6,221	92.1
ま ゆ	1,456	80.0
バ ナ ナ	338,206,000 房	6.0
コ シ ョ ウ	18,600	82.0
ラ ミ ー 麻	1,500	91.7
ハ ッ カ 油	2,000	50.0

域への移動をうながしていった。さらに、職業構造においても、農業人口の相対的比率の低下と商工業人口の上昇が見られるようになる。それでも、戦前の農業人口の割合は、1920年が96パーセント、1932年が87.6パーセント、1935年が89.3パーセント、1940年が87.2パーセントであり、商工業人口のそれぞれ 2.2パーセント、7.8 パーセント、7.2 パーセント、8.6 パーセントを大きく上回っていた。

こうした結果として、表3に示すように、戦後も日本人はブラジルの農業に大きな貢献をしてきているといえる（富野・住田，1990）。

2. 戦後日系移民の宗教意識

すでに述べたように（島，1991,pp.67－69），ブラジルの人口の8割は，カトリックの洗礼を受けていると言われるほど，ブラジルはカトリックの国で

ある。

表4 ブラジル、バジェ市民の宗教分布（日系人を除く）

（島，1991. p. 68より）

	男 性	女 性	計
調査人数	103	99	202
Católica （カトリック）	88 (77.7)	76 (76.8)	156 (77.2)
Umbanda （アフリカ教）	2 (1.9)	3 (3.0)	5 (2.5)
Protestante* （プロテスタント）	4 (3.9)	11 (11.1)	15 (7.4)
Protestante** （プロテスタント）	2 (1.9)	2 (2.0)	4 (2.0)
Espirita （エスピリタ教）	12 (11.7)	5 (5.1)	17 (8.4)
無宗教	3 (2.9)	2 (2.0)	5 (2.5)

注：（ ）内の数は，調査人数に対する％

* Evangelica（ピューリタン），Episcopal(Anglican church), Batista
（バプテイスト），など英米系に信者の多いプロテスタント

** ルター派，カルビン派，などヨーロッパ大陸に信者の多いプロテスタント

ブラジルの宗教分布の一端を示すものとして，われわれがバジェ市で実施した調査結果を表4に示す。“宗教は何を信じていますか？（Qual a sua religião？）”という質問に対する回答結果を示したのが表4である。

調査対象者は，49歳から55歳までの主に50歳代前半の中年男女のバジェ市民であり，男女それぞれランダムに選んだ。人種的には，ポルトガル系がもっとも多く，その他，イタリア，ドイツ，スペイン，そして白系ロシアなどのヨーロッパ系の人々が主体であるが，少数のアラブ系や黒人系の人々も交じっている。この人種構成は，バジェ市民のそれを正確に反映している。なお，後で述べるように，バジェ市には農業に従事している日本人が10数家族位居住しているが，それらの人々除いてある。

やはり，カトリック（Católica）信者が圧倒的に多く，男女ともに8割近くを占めていた。

Umbanda の信者が少なかったのは、バジェ市に黒人市民が少なかったからだと考えられる。他州では、もっと多数のUmbanda の信者がみられる。

注目すべきことは、プロテスタントの信者数と同数近くのEspiritaの信者がいたことである。バジェ市にはEspiritaの教会もあり、熱心な信者の存在がうかがえた(島, 1991)。

ところが、戦後の日本人移民は、ブラジルへ移住後どのような宗教意識をもって生活してきたのであろうか。彼らの宗教意識を調べる項目も含めて、広く彼らのブラジルでの生活体験やブラジル社会への適応感を調べるために、質問紙を作成し、それに基づいた面接調査を実施した。さらに、個別により詳しい面談も行った。

2-1 方 法

調査地域

日系移民の調査実施地域は、三地域であり、すべてリオグランデ・ド・スル州内にある。

同州の南端、ウルグァイとの国境近くのバジェ (Bagé) 市、ポルト・アレグレのすぐ北にあるイボチ (Ivoti)の日本人コロニー、そしてポルト・アレグレ (Pôrto Alegre) 市である (図1 参照)。

具体的な調査実施場所は、バジェが市立体育館、イボチの日本人コロニーがイボチ日伯文化体育協会会館、そしてポルト・アレグレが日本人会館であり、調査対象者は各場所へ来訪し面接調査を受けた。一部は、各家庭へ訪問し調査した。

調査対象

バジェ市在住の日本人15家族のうち、11家族は夫か妻のどちらかが日本へ出稼ぎ中であり、調査できた人数は、男性4名と女性1名の計5名にすぎなかった。この人々はすべて戦後移民である。

イボチの日本人コロニーで42名、ポルト・アレグレで53名の人々を調査し

た。ただしこの中には数名の戦前移民が含まれているので、調査できた戦後移民は、表5に示すように、イボチで男性21名と女性17名の計38名であり、

表5 調査対象者の年齢

		男 性	女 性	計
ポルト・アレグレ	人 数	19	27	46
	平均年齢	59.95	61	60.57
	標準偏差	11.21	11.72	11.40
	年 齢 幅	47年－78年	41年－79年	41年－79年
イボチ	人 数	21	17	38
	平均年齢	56.43	52.59	54.71
	標準偏差	10.67	11.67	11.14
	年 齢 幅	39年－78年	34年－71年	34年－78年
バジェ	人 数	4	1	5
	平均年齢	54.25	53	54
	標準偏差	7.37	—	6.40
	年 齢 幅	45年－63年	—	45年－63年
計	人 数	44	45	89
	平均年齢	57.75	57.64	57.70
	標準偏差	10.65	12.16	11.38
	年 齢 幅	39年－78年	34年－79年	34年－79年

ポルト・アレグレで男性19名と女性27名の計46名であった。

三地域の総計は、男性44名と女性45名の計89名である。また、移民二世も除いた。

調査時期

バジェ市では、1990年8月2日から同年8月6日までの6日間、イボチの日本人コロニーは同年8月9日の1日、そしてポルト・アレグレ市では、同年8月10から14日までの5日間、それぞれ各地に滞在し、それぞれの場所で面接調査を行った。

調査分析項目

質問項目は全部で72項目であるが、ここでは本報告で分析した項目のみを記す。

また、以下に記述する質問項目は、必ずしも質問紙の項目番号順ではない。

まず、フェース・シートで、氏名、移住地名、居住地域、性別、そして生年月日を聞いた。

Q 1. あなたの職業は何ですか。

1. 農業 2. 商業 3. サラリーマン ()
4. その他 ()

Q 2. あなたはどこで生まれましたか。

1. 日本 2. ブラジル 3. その他 ()

Q 3. あなたは日本に住んでいたことがありますか。

1. はい 2. いいえ

Q 3 - 1 “はい”と答えた人は、

何歳の時から何年間ですか。

() 歳から () 年間。

Q 3 - 2 “はい”と答えた人は、

何県ですか (二つ以上の場合もすべて答えて下さい)。

(, , , ,) 県 (市・町)

Q 4. あなたはブラジルに何年間、住んでいますか。 () 年間。

Q 5. あなたは、小・中学生時代をおもにどこで過ごしましたか。

1. 日本 2. ブラジル 3. その他 ()

Q 6. あなたがブラジルへ初めて来た時、ポルトガル (ブラジル) 語をどの程度話せましたか。

1. 自由に話せた。 2. かなり話せた。 3. すこし話せた。 4. ほとんど話せなかった。 5. まったく話せなかった。 6. その他 ()

Q 7. あなた自身は、どの宗教を信じていますか。

1. 佛教 (宗) 2. カトリック (キリスト) 教 3. プロテス

タント（キリスト）教 4. その他（ ）

Q 8. あなたは、あなたの信じている宗教についてどの程度知っていますか。

5. よく知っている 4. かなり知っている 3. すこし知っている
2. ほとんど知らない 1. まったく知らない。
0. その他（ ）

Q 9. あなたは熱心な信者ですか。

3. はい 2. どちらともいえない 1. いいえ

Q10. あなたはカテシズム（公教要理）の勉強をしましたか。

1. はい 2. いいえ

Q11. あなたはキリスト教の教会で結婚式を挙げましたか。

1. はい 2. いいえ

Q12. あなたはキリスト教の教会にどの程度行きますか。

1. いつも行く 2. 時々いく 3. 行かない

Q13. あなたは、カトリック教についてどのように思っていますか。

7. 熱心な信者である 6. 入信している 5. 入信したいと思っている
4. 親しみをもてるが、入信できない 3. あまり関心がない
2. まったく関心がない 1. 反感を持っている 0. その他（ ）

Q14. あなたは、お盆やお彼岸などの行事をしますか。

5. 毎年必ずする。 4. 割合する方である 3. たまにする 2. ほとんどしない
1. 全然しない 0. その他（ ）

Q15. あなたは、ブラジルでの生活で困ったことがありましたか。

7. 困ったことばかりだった。 6. かなり困ったことがある。 5. すこし困ったことがある。
4. どちらとも言えない。 3. あまり困ったことがない。 2. ほとんど困ったことがない
1. 全然困ったことがない

Q15-1 “困ったことがある（7, 6, 5）”と答えた人は、それは何ですか。（ ）

Q16. あなたは、ブラジルの生活にどの程度慣れましたか。

7. 完全に慣れている。6. かなり慣れている。5. すこし慣れている。
4. どちらとも言えない。3. すこし慣れていない。2. かなり慣れていない。1. まったく慣れていない。

Q17. あなたは、ブラジル社会の生活の習慣をどう思われますか。

7. 完全に親しみをもっている 6. かなり親しみをもっている
5. すこし親しみをもっている 4. どちらとも言えない 3. すこし反感をもっている 2. かなり反感をもっている 1. 完全に反感をもっている

調査手続

日本で作成した質問紙の原案を、ポルト・アレグレに到着後、森口教授および移民二世でブラジル生まれの教授夫人森口カオル女史と検討し、部分的に修正した質問紙に基づいて面接調査を実施した。

まず、質問項目および質問の意図を、日本から同行した数名の調査団員に詳しく説明した。三地域での調査は、団員数名が中心となって面接を行い、回答事項を質問紙に記入した。筆者は面接中、常に立会い、面接終了後、質問紙を点検して不備な点があれば、筆者が補足面接を行った。また、面接時間は、約30分から1時間のあいだである。

2-2. 結 果

まず、戦後移民の弁別を行う。生年月日とQ2, Q3, Q4, そしてQ5の4つの質問とにより、戦前移民、戦後移民、あるいは移民二世かを弁別した。

次いで、Q4の結果に基づいて戦後移民のブラジル在住年数を整理したのが、表6である。リオグランデ・ド・スル州の戦後移民は、1953（昭和28）年から始まっているので、最長のブラジル在住年数は、1990年の調査時点で37年である。

表6 性別と地方別のブラジル在住数（Q4）

		男 性	女 性	計
ポルト・アレグレ	人 数	19	25※	44
	平均年数	29.74	30.16	29.98
	標準偏差	2.45	3.01	2.76
	年 数 幅	23年－34年	22年－37年	22年－37年
イボチ	人 数	21	17	38
	平均年数	29.14	27.82	28.55
	標準偏差	4.45	7.39	5.90
	年 数 幅	20年－35年	13年－35年	13年－35年
バジェ	人 数	4	1	5
	平均年数	29	29	29
	標準偏差	0	—	0
	年 数 幅	—	—	—
計	人 数	44	43	87
	平均年数	29.39	29.21	29.30
	標準偏差	3.44	5.23	4.39
	年 数 幅	20年－35年	13年－37年	13年－37年

※ポルト・アレグレの女性27名のうち2名が無回答なので回答者数は25名。

ポルト・アレグレの平均在住年数は、男女ともほぼ30年であり、イボチのそれは、男性が29年、女性が28年であり、バジェはすべてちょうど29年である。三地域とも平均のブラジル在住年数は約30年である。

性別と地方別の職業区分表が表7である。全体的にみると、やはり農業が多い。イボチとバジェは圧倒的に農業が多いけれども、ポルト・アレグレは大都会だけあって他の二地域と多少異なった職業構成を示している。

バジェは、今回調査できなかった人々を含めて、すべて長崎県壱岐島出身者であり、農業を営んでいるけれども、市内に店を構えて野菜果物商を兼業して主に自分の栽培した作物を売っている人々もいる。男性の一名は、農業と八百屋の兼業である。商業の女性は、夫の農地で栽培された野菜を店で売っているのである。

表7 性別と地方別の職業（Q1）

	ポルト・アレグレ			イボチ			バジェ			合計
	男 性	女 性	計	男 性	女 性	計	男 性	女 性	計	
農 業	11 (57.9)	7 (25.9)	18 (39.1)	21 (100)	15 (88.2)	36 (94.7)	4 (100)		4 (80)	58 (65.2)
商 業	3 (15.8)	*** (6.5)	3 (6.5)					1 (100)	1 (20)	4 (4.5)
サラリーマン	2 (10.5)	3 (11.1)	5 (10.9)		1 (5.9)	1 (2.6)				6 (6.7)
主 婦		14 (51.9)	14 (30.4)		1 (5.9)	1 (2.6)				15 (16.9)
そ の 他	* 2 (10.5)	*** 3 (11.1)	5 (10.9)							5 (5.6)
無 回 答	1 (5.3)		1							1 (1.1)
計	19 (100)	27 (100)	46 (100)	21 (100)	17 (100)	38 (100)	4 (100)	1 (100)	5 (100)	89 (100)

注：数字は人数，（ ）内の数は性別，地方毎の％を表す。

* 弁護士とマッサージ師。***洗濯屋勤務1名と事務員1名を含む。****日本語教師2名と大学教員1名。

イボチの日本人コロニーは，主に果樹園経営の農家のあつまりであり，中心作物はブドウである。サラリーマンおよび主婦と答えた女性それぞれ1名を除き，他はすべて果樹園農家である。

ポルト・アレグレでは，男性の6割弱が農民であり，商業3名，サラリーマン2名，そして，その他が2名であった。その他の2名は，弁護士とマッサージ師である。一方，女性の5割強が専業主婦であり，クリーニング店勤務1名と事務員1名との2名を含む3名が商業，日本語教師2名と大学教員1名とのその他が3名，残り7名が農業である。農業の7名は女性の1/4を占めていた。

三地域に共通している特徴は，ポルト・アレグレでの少数の知的職業以外は，農業と主婦を中心とする肉体労働に従事しているか従事していたことである。

現在年齢的に5，60歳代になっている戦後移民は，ブラジル在住期間も約30年位になるが，彼らが移民としてブラジルへ初めて来た時，ポルトガル語

をどの程度話せたのだろうか。この間に対する回答結果が表8である。全体的にみると、ほとんど話せなかったと全く話せなかったという人をあわせて75名(84.3%)であり、実に8割5分の人々が言葉を話せないまゝにブラジルの土を踏んだのである。すこし話せた人が約1割5分であり、かなり話せた人はイボチの男性ただ一人であった。

地域別に比較すれば、すこし話せる以上の人の比率は、イボチが23.7%(9名)、ポルト・アレグレが10.9%(5名)、バジェは0%であった。イボチがポルト・アレグレの約2倍の割合である。この地域差を明確にするために、回答の選択肢を評点化する。すなわち、自由に話せた、かなり話せた、すこし話せた、ほとんど話せなかった、そして、全く話せなかった、をそれぞれ5、4、3、2、そして、1点にする。表8に基づく性別と地方別の平均と標準偏差とを示したのが表9であり、表9に基づく分散分析表が表10である。

表8 ブラジルへ初めて来た時、ポルトガル語が話せたか?(Q6)

	ポルト・アレグレ			イボチ			バジェ			合計
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	
自由に話せた										
かなり話せた				1 (4.8)		1 (2.6)				1 (1.1)
すこし話せた	4 (21.1)	1 (3.7)	5 (10.9)	6 (28.6)	2 (11.8)	8 (21.1)				13 (14.6)
ほとんど話せなかった	8 (42.1)	7 (25.9)	15 (32.6)	10 (47.6)	8 (47.1)	18 (47.4)				33 (37.1)
全く話せなかった	7 (36.8)	19 (70.4)	26 (56.5)	4 (19.0)	7 (41.2)	11 (28.9)	4 (100)	1 (100)	5 (100)	42 (47.2)
計	19 (100)	27 (100)	46 (100)	21 (100)	17 (100)	38 (100)	4 (100)	1 (100)	5 (100)	89 (100)

注：数字は人数，() 内の数は性別，地方毎の%を表す。

表9の平均を比較すれば、地域別のポルトガル語を話せない程度の違いが表8よりも明確になる。バジェ、ポルト・アレグレ、そしてイボチの順に、話せない程度が悪くなるのがよく分かる。分散分析の結果、表10に示すように、地方要因の主効果にのみ統計的に有意な差が認められた。

地方要因の主効果は、男女を含みにして、地方によりポルトガル語を話せなかった程度に差が認められることを示している。平均得点は、イボチが1.97（ほとんど話せなかった）、ポルト・アレグレが1.54（ほとんど話せなかったと全く話せなかったの中間）、そしてバジェが1（全く話せなかった）である。ポルト・アレグレとバジェの間（ $F=2.8$, $df=1/83$, $p<.10$ ）には傾向が認められ、ポルト・アレグレとイボチの間（ $F=8.1$, $df=1/83$, $p<.10$ ）およびイボチとバジェの間（ $F=8.8$, $df=1/83$, $P<.01$ ）にはそれぞれ統計的に有意な差が認められた。イボチ>ポルト・アレグレ>バジェの順でポルトガル語が話せなかった程度がひどくなるということを示している。

以上の結果から、調査した戦後移民は現在年齢は、平均的に50歳代後半から60歳代前半の人々が中心であり（表5）、ブラジル在住期間は、約30年位であり（表6）、職業は、農民がほとんどであり（表7）、ブラジルへ初めて

表9 表8に基づく性別と地方別の平均と標準偏差（Q6）

		ポルト・アレグレ	イボチ	バジェ	計
男性	人数	19	21	4	44
	平均	1.84	2.19	1	1.93
	標準偏差	0.76	0.81	0	0.82
女性	人数	27	17	1	45
	平均	1.33	1.71	1	1.47
	標準偏差	0.55	0.69	0	0.63
計	人数	46	38	5	89
	平均	1.54	1.97	1	1.70
	標準偏差	0.69	0.79	0	0.76

注：5段階評定尺度。点数が高いほどポルトガル語を話せた程度が高い。

5（自由にはなせた）－1（全く話せなかった）。

表10 表9に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性別)	0.68	1	0.68	1.43
B (地方別)	3.81	2	1.96	4.03 ***
A×B	0.34	2	0.17	<1
誤差	39.30	83	0.47	

*** $p < .05$

来た時はポルトガル語がほとんど話せなかった（表8）けれども、地方により話せなかった程度に違いが認められ、イボチ＞ポルト・アレグレ＞バジェの順で話せなかった程度がひどかったことを示している（表9, 10）。

ここで、核心の宗教意識にかかわる質問項目の回答結果を分析することにする。

Q7の回答結果に基づく地方別と性別の信じている宗教の分布を示したのが、表11である。その他の回答に含まれていた成長の家、創価学会、そしてPLをまとめて日本の新興宗教として示してある。

全体としてみると、佛教がもっとも多く、回答者84名のうち、54.8%（46名）を占めており、ブラジルへ移住して30年位たっても日本にいた場合と同様に佛教を一応信じている人々が過半数を占めているのである。佛教以外はぐっと少なくなり、カトリックが15.5%（13名／84名）、プロテスタントが11.9%（10名／84名）、日本の新興宗教が9.5%（8名／84名）、そして「その他」が2.4%（2名／84名）であった。なお、無回答者が5名いた。

地方別の信仰では、バジェの5名がすべて佛教を信じていたことを除けば、ポルト・アレグレとイボチとの宗教分布は、ほぼ全体の傾向をそのまま反映している。イボチの日本人コロニーへは、以前かなり長期間のあいだ森口教授および同教授のご子息がカトリック教の布教活動を熱心にされたと聞くが、その信者数はポルト・アレグレと比較してとくに多いということはない。

バジェは人数が少なく、ポルト・アレグレとイボチとの宗教分布の傾向がたいへん類似していたので、以下の分析では、三つの地域を込みにして、男

表11 地方別と性別の信じている宗教の分布 (Q7)

	ポルト・アレグレ			イボチ			バジェ			合計
	男 性	女 性	計	男 性	女 性	計	男 性	女 性	計	
佛 教	8 (42.1)	17 (63.0)	25 (54.3)	11 (52.4)	5 (29.4)	16 (42.1)	4 (100)	1 (100)	5 (100)	46 (51.7)
新興宗教(日本)*	2 (10.5)	1 (14.8)	3 (6.5)	2 (9.5)	3 (17.6)	5 (13.2)				8 (9.0)
カトリック	4 (21.1)	4 (14.8)	8 (17.4)	3 (14.3)	2 (11.8)	5 (13.2)				13 (14.6)
プロテスタント	3*** (15.8)	3*** (11.1)	6 (13.0)	1 (4.8)	3 (17.6)	4 (10.5)				10 (11.2)
そ の 他		1 (3.7)	1 (2.2)		1 (5.9)	1 (2.6)				2 (2.2)
無 宗 教	1 (5.3)		1 (2.2)	3 (14.3)	1 (5.9)	4 (10.5)				5 (5.6)
無 回 答	1 (5.3)	1 (3.7)	2 (4.3)	1 (4.8)	2 (11.8)	3 (7.9)				5 (5.6)
計	19 (100)	27 (100)	46 (100)	21 (100)	17 (100)	38 (100)	4 (100)	1 (100)	5 (100)	89 (100)

注：数字は人数，（ ）内の数は性別，地方毎の％を表す。＊成長の家，創価学会，そしてPLである。

***インバンゼリカ(Evangelica, 福音派) 1名を含む。

性と女性との性差と，佛教，日本の新興宗教，カトリック，そして，プロテスタントの四つの宗教とを独立変数として回答結果を整理することにする。

自分の信じている宗教についてどの程度の知識をもっているかを調べる質問項目がQ8である。Q8の回答結果に基づく性別と宗教別の知識の程度の平均と標準偏差とを示したのが表12である。表12に基づく分散分析表が表13である。分散分析の結果，性別×宗教別の交互作用 ($F=2.35$, $df=3/66$, $.05 < p < .10$) にのみ傾向が認められた。

交互作用に統計的な有意差が認められなかったけれども，傾向が認められたので，念のために，全体の誤差平均平方和を分母として個々の平均差の検定を行った。

佛教の男女間 ($F < 1$, $n.s.$), 新興宗教(日本)の男女間 ($F=2.5$, $df=1/66$, $n.s.$), カトリックの男女間 ($F=2.0$, $df=1/66$, $n.s.$), そしてプロテスタントの男女間 ($F=2.6$, $df=1/66$, $n.s.$) のすべてにおいて統計的な有意差が認められなかった。

表12 性別と宗教別の信じている宗教の知識の程度 (Q 8)

		佛 教	日 本 の 新 興 宗 教	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	22*	4	7	4	37
	平 均	2.68	3	3.86	2.75	2.95
	標準偏差	1.08	0.82	1.21	0.50	1.08
女 性	人 数	21***	4	6	6	37
	平 均	2.90	4	3.17	3.67	3.19
	標準偏差	0.70	0.82	0.75	0.82	0.81
計	人 数	43	8	13	10	74
	平 均	2.79	3.50	3.54	3.30	3.07
	標準偏差	0.89	0.93	1.05	0.82	0.96

注：5段階評定尺度，点数が高いほど知っている程度が高い。5（よく知っている）

－1（全く知らない）。

※無回答者1名を除く。

***無回答者2名を除く。

表13 表12に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性 別)	1.59	1	1.59	2.01
B (宗教別)	4.19	3	1.40	1.77
A×B	5.59	3	1.86	2.35*
誤 差	52.35	66	0.79	

※.05 < p < .10 傾向あり

また，男性においては，佛教と新興宗教の間 ($F < 1$, $n.s.$)，佛教とプロテスタントの間 ($F < 1$, $n.s.$)，新興宗教とカトリックの間 ($F = 2.4$, $df = 1 / 66$, $n.s.$)，そして新興宗教とプロテスタントの間 ($F < 1$, $n.s.$)には有意差は認められなかったけれども，佛教とカトリックの間 ($F = 9.3$, $df = 1 / 66$, $p < .01$)およびカトリックとプロテスタントの間 ($F = 4.0$, $df = 1 / 66$, $p < .05$)にそれぞれ有意差が認められた。

女性では，佛教とカトリックの間 ($F < 1$, $n.s.$)，新興宗教とカトリックの間 ($F = 2.1$, $df = 1 / 66$, $n.s.$)，新興宗教とプロテスタントの間 ($F < 1$,

n. s.), そしてカトリックとプロテスタントの間 ($F < 1$, n. s.)には有意差が認められなかったけれども, 佛教とプロテスタントの間 ($F = 3.4$, $df = 1/66$, $p < .10$)には傾向が認められ, 佛教と新興宗教の間 ($F = 5.1$, $df = 1/66$, $p < .05$)には統計的に有意な差が認められた。

これらの結果は, 男性では, カトリック信者 (平均評定点3.86) が佛教徒 (平均評定点2.68) とプロテスタント信徒 (平均評定点2.75) よりも自分の信じる宗教の知識が深いことを示しており, 女性では, 新興宗教信徒 (平均評定点4.00) およびプロテスタント信者 (平均評定点3.67) が佛教徒 (平均評定点2.90) よりも自分の信ずる宗教の知識が深いことを示している。

男性のカトリック教徒と女性の新興宗教信徒および女性のプロテスタント信徒とがその信ずる宗教についてかなりよく知っているけれども, 佛教の信徒は男女とも佛教についてよく知らないということを示している。

佛教徒が男女ともに佛教についての知識があまりないという結果は, 納得いく結果である。キリスト教徒や新興宗教の信者を除く多くの日本人は, 宗教はと聞かれれば, 家代々の佛教の宗派名を答える。浄土宗, 浄土真宗 (門徒), 真言宗, 曹洞宗, 臨済宗, 等々, あるいは, 禅宗, 西東本願寺, お大師 (弘法大師) さん, などと答える。僧侶と接する場合も葬式や法事ときだけであり, 佛典を紐解くことなど考えられないのである。僧侶という言葉は, 葬式や法事としか結びつかないのである。戦後長らく日本の状況がこのようなであったから, 30年程前にブラジルへ移住した日本人の場合も全く同様であろうと考えられる。

次に, 熱心な信者か否かを問うたQ9の回答結果を整理する。性別と宗教別の信者としての熱心さの程度の平均と標準偏差とを示したのが表14である。表14に基づく分散分析表が表15である。分散分析の結果, 宗教要因の主効果 ($F = 3.56$, $df = 3/61$, $p < .05$) にのみ統計的に有意な差が認められた。

宗教要因の主効果は, 男女を込みにして, 宗教の違いにより熱心さが異なることを示している。平均評価得点は, 佛教が1.25, 新興宗教が1, カトリックが1.83, そして, プロテスタントが1.80である。佛教と新興宗教の間 (F

表14 性別と宗教別の信者としての熱心さ (Q9)

		佛 教	日 本 の 新 興 宗 教	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	21 [*]	3 ^{**}	6 ^{**}	4	34
	平 均	1.24	1	1.5	1.25	1.26
	標準偏差	0.62	0	0.84	0.5	0.62
女 性	人 数	19 ^{***}	4	6	6	35
	平 均	1.26	1	2.17	2.17	1.54
	標準偏差	0.65	0	0.98	0.98	0.85
計	人 数	40	7	12	10	69
	平 均	1.25	1	1.83	1.80	1.41
	標準偏差	0.63	0	0.94	0.92	0.75

注：3段階評定尺度，点数が高いほど熱心である。3（熱心な）－1（違う）。

※ 無回答者2名を除く。

※※ 無回答者1名を除く。

※※※ 無回答者4名を除く。

表15 表14に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性 別)	1.84	1	1.84	3.83
B (宗教別)	5.13	3	1.71	3.56 ^{**}
A×B	1.84	3	0.61	1.27
誤 差	29.40	61	0.48	

※※※ $p < .05$

<1, *n. s.*) およびカトリックとプロテスタントの間 ($F < 1$, *n. s.*)には有意差は認められなかったけれども，佛教とカトリックの間 ($F = 6.5$, $df = 1/61$, $p < .05$), 佛教とプロテスタントの間 ($F = 5.0$, $df = 1/61$, $p < .05$), 新興宗教とカトリックの間 ($F = 6.4$, $df = 1/61$, $p < .05$), そして新興宗教とプロテスタントの間 ($F = 5.5$, $df = 1/61$, $p < .05$)にそれぞれ有意差が認められた。

この結果は，カトリックとプロテスタントとの信者の方が明らかに佛教と新興宗教との信者よりも熱心な信者であることを示しているのである。佛教と新興宗教との信者は熱心な信者ではないけれども，カトリックとプロテス

タントとの信者は普通の信者であることを示していた。

Q10からQ13までの四つの質問は、主にカトリック教に対する親密さを問う質問である。

カテシズム（公教要理、カトリックに入信するための資格審査のようなもの。ただし、カテシズムの勉強をしたからといって必ず入信するとは限らない。）の勉強をしたか否かというQ10の質問に対する回答結果を、性別と宗教別に整理したのが表16である。

カトリック教徒は、男性の71.4%（5名／7名）、女性50%（3名／6名）

表16 カテシズム（公教要理）の勉強をしたか否か（Q10）

		佛 教	日 本 の 新 興 宗 教	カトリック	プロテスタント	計
男 性	勉強した	—	2 (50)	5 (71.4)	—	7 (18.4)
	し ない	20 (87.0)	2 (50)	2 (28.6)	3 (75)	27 (71.1)
	無 回 答	3 (13.0)	—	—	1 (25)	4 (10.5)
	人 数	23 (100)	4 (100)	7 (100)	3 (100)	27 (100)
女 性	勉強した	1 (4.3)	1 (25)	3 (50)	2 (33.3)	7 (17.9)
	し ない	15 (65.2)	3 (75)	3 (50)	3 (50)	24 (61.5)
	無 回 答	7 (30.4)	—	—	1 (16.7)	8 (20.5)
	人 数	23 (100)	4 (100)	6 (100)	6 (100)	39 (100)
計	勉強した	1 (2.2)	3 (37.5)	8 (61.5)	2 (20)	14 (18.2)
	し ない	35 (76.1)	5 (62.5)	5 (38.5)	6 (60)	51 (66.2)
	無 回 答	10 (21.7)	—	—	2 (20)	12 (15.6)
	人 数	43 (100)	8 (100)	13 (100)	10 (100)	77 (100)

注：数字は人数，（ ）内の数は性別，宗教別の％を示す。

が勉強したと回答している。他の宗教では、佛教の女性が 4.3%（1名／23名），新興宗教の男性が50%（2名／4名），女性が25%（1名／4名），プロテスタントの女性が33.3%（2名／6名）それぞれ勉強したと回答している。

次に、Q11の基督教の教会で結婚式を挙げたか否かという質問に対する回答結果を、性別と宗教別に示したのが表17である。基督教の教会で結婚式を挙げた人の数が非常に少ないのが目立っている。全体でただの14.3%（11名／77名）だけである。

宗教別では、カトリックの男性の割合がもっとも高く、42.9%（3名／7

表17 教会で結婚式を挙げたか否か（Q11）

		佛 教	新 興 宗 教 (日 本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	挙 げ た	4 (17.4)	1 (25)	3 (42.9)	—	8 (21.1)
	い い え	15 (65.2)	3 (75)	3 (42.9)	3 (75)	24 (63.2)
	無 回 答	4 (17.4)	—	1 (14.3)	1 (25)	6 (15.8)
	人 数	23 (100)	4 (100)	7 (100)	4 (100)	38 (100)
女 性	挙 げ た	2 (8.7)	—	1 (16.7)	—	3 (7.7)
	い い え	17 (73.9)	4 (100)	5 (83.3)	6 (100)	32 (82.1)
	無 回 答	4 (17.4)	—	—	—	4 (10.3)
	人 数	23 (100)	4 (100)	6 (100)	6 (100)	39 (100)
計	挙 げ た	6 (13.0)	1 (12.5)	4 (30.8)	—	11 (14.3)
	い い え	32 (69.6)	7 (87.5)	8 (61.5)	9 (90)	56 (72.7)
	無 回 答	8 (17.4)	—	1 (7.7)	1 (10)	10 (13.0)
	人 数	46 (100)	8 (100)	13 (100)	10 (100)	77 (100)

注：数字は人数，（ ）内の数は性別，宗教別の%を示す。

表18 性別と宗教別の教会へ行く程度（Q12）

		佛 教	新 興 宗 教 (日 本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	21 *	4	6 **	4	35
	平 均	1.19	1.50	1.83	1.75	1.40
	標準偏差	0.40	0.58	0.41	0.50	0.50
女 性	人 数	20 ***	4	6	6 ****	36
	平 均	1.30	1.25	1.83	1.50	1.42
	標準偏差	0.47	0.50	0.75	0.55	0.55
計	人 数	41	8	12	10	71
	平 均	1.24	1.38	1.83	1.60	1.41
	標準偏差	0.43	0.52	0.58	0.52	0.52

注：3段階評定尺度，点数が高いほどよく教会へ行く。3（いつも行く）－1（行かない）。

※ 無回答者2名を除く。

※※ 無回答者1名を除く。

※※※ 無回答者3名を除く。

※※※※ “遠いから行けない” 2名を含む。

表19 表18に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性 別)	0.11	1	0.11	<1
B (宗教別)	2.42	3	0.81	3.36 **
A×B	0.29	3	0.10	<1
誤 差	15.10	63	0.24	

※※ $p < .05$

名)であるが，カトリックの女性は16.7%（1名／6名）であった。プロテスタントの男女は誰一人として教会で結婚式を挙げた人はいなかった。他は，佛教の男性が17.4%（4名／23名），同じく女性が8.7%（2名／23名），新興宗教の男性が25%（1名／4名）であった。

カトリックとプロテスタントの信者がすべてキリスト教の教会で式を挙げたわけではなかったのは，理由が二つ考えられる。一つは，彼らの多くが日本で結婚してからブラジルへ移住後にキリスト教に入信したからである。もう一つは，この人々が戦後の混乱期にブラジルへ移住したのであり，結婚も

移住前後にした人が結構多いので、現在のように挙式する余裕がなかったことによる。

キリスト教徒以外の佛教の男女と新興宗教の男性とがキリスト教の教会で挙式したという事実は、日本人の風俗の特徴をよくあらわしている。日本人の多くは、先祖代々の佛教徒であろうが、彼らは信仰や宗派に関係なく、キリスト教の教会で結婚式を挙げるのが好きである。その傾向は、近年ますます拍車がかかり、一つの風俗として定着してしまったのである。

次いで、キリスト教の教会へ行く程度についての性別と宗教別の評定点の平均と標準偏差とを示したのが表18であり、表18に基づく分散分析表が表19である。分散分析の結果、宗教要因の主効果 ($F=3.36, df=3/63, p<.05$) のみに統計的な有意差が認められた。男女を込みにして、宗教の違いにより、教会へ行く頻度が違うということを示している。平均評価得点は、佛教、新興宗教、カトリック、そしてプロテスタントでそれぞれ1.24, 1.38, 1.83, そして1.60であった。佛教と新興宗教との間 ($F<1, n.s.$), 新興宗教とプロテスタントの間 ($F<1, n.s.$), そしてカトリックとプロテスタントの間 ($F=1.2, df=1/63, n.s.$) では統計的な有意差が認められなかったけれども、佛教とカトリックの間 ($F=13.5, df=1/63, p<.01$), 佛教とプロテスタントの間 ($F=4.3, df=1/63, p<.05$), および新興宗教とカトリックとの間 ($F=4.2, df=1/63, p<.05$) では有意差が認められた。

これらの結果は、カトリックとプロテスタントの信徒は佛教徒よりもよく教会へ行き、カトリック教徒は新興宗教の信者よりもよく教会へ行くということを示している。

カトリックとプロテスタントの信徒が佛教の教徒よりもよくキリスト教の教会へ行くというのは、当然といえば当然のことである。キリスト教の信者はもっと頻繁に教会へ行くだろうと予想していたが、予想していたほどではなかった。これは地理的理由によるのであろう。なぜなら、プロテスタントの信者のうち2名は、“遠いから行けない”と明記していたからである。

カトリックに対する親密さを直接聞いたQ13の結果である性別と宗教別の

評定点の平均と標準偏差とを示したのが表20である。表20に基づく分散分析表が表21である。

分散分析の結果、宗教要因の主効果 ($F=32.58$, $df=3/64$, $p<.01$) のみに統計的に有意な差が認められた。

宗教要因の主効果は、男女を含みにして、宗教の違いによりカトリックに対する親しみ程度が異なるということを示している。平均評定点は、佛教、新興宗教、カトリック、そしてプロテスタントでそれぞれ、3.05、3.25、6.08、そして3.22である。“入信している”カトリック教徒以外は、“あまり関心がない”のである。

表20 性別と宗教別のカトリック教に対する親しみの程度 (Q13)

		佛 教	新興宗教 (日本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	21 [*]	4	7	3 ^{***}	35
	平 均	2.95	3.75	6	3.67	3.71
	標準偏差	0.92	0.50	0	0.58	1.41
女 性	人 数	21 [*]	4	6	6	37
	平 均	3.14	2.75	6.17	3	3.57
	標準偏差	0.79	0.96	0.41	1.55	1.46
計	人 数	42	8	13	9	72
	平 均	3.05	3.25	6.08	3.22	3.64
	標準偏差	0.85	0.89	0.28	1.30	1.43

注：7段階評定尺度、点数が高いほど親しみが強い。7（熱心な信者である）

－1（反感をもっている）。

※ 無回答者2名を除く。

*** 無回答者1名を除く。

表21 表20に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性 別)	1.22	1	1.22	1.68 ^{***}
B (宗教別)	71.05	3	23.68	32.58
A × B	3.09	3	1.03	1.42
誤 差	46.52	64	0.73	

*** $p<.01$

佛教と新興宗教の間 ($F < 1$, $n.s.$), 佛教とプロテスタントの間 ($F < 1$, $n.s.$), および新興宗教とプロテスタントの間 ($F < 1$, $n.s.$)では有意差が認められなかったけれども, カトリックと佛教の間 ($F = 125.3$, $df = 1/64$, $p < .01$), カトリックと新興宗教の間 ($F = 54.4$, $df = 1/64$, $p < .01$), およびカトリックとプロテスタントの間 ($F = 59.6$, $df = 1/64$, $p < .01$)には有意な差が認められた。

これらの結果は, カトリック教徒以外の人々が, カトリックにあまり関心がないということを明確に示しているのである。日系移民は, カトリック教徒になっている人以外は, プロテスタント教徒も含めてカトリックに対して

表22 性別と宗教別のお盆やお彼岸などの行事をする程度 (Q14)

		佛 教	新 興 宗 教 (日 本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	21 [*]	3 ^{***}	7	4	35
	平 均	3.43	4.67	3.71	2	3.43
	標準偏差	1.47	0.58	1.25	0.82	1.42
女 性	人 数	21 [*]	4	6	6	37
	平 均	4.38	4.25	3.67	3	4.03
	標準偏差	1.02	0.96	1.51	1.79	1.30
計	人 数	42	7	13	10	72
	平 均	3.90	4.43	3.69	2.60	3.74
	標準偏差	1.34	0.79	1.32	1.51	1.38

注：5段階評定尺度, 点数が高いほど行事をよくする。5（毎年必ずする）－1（全然しない）。

※ 無回答者2名を除く。

*** 無回答者1名を除く。

表23 表22に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性 別)	1.58	1	1.58	<1
B (宗教別)	23.27	3	7.76	4.67 ^{***}
A × B	4.32	3	1.44	<1
誤 差	106.27	64	1.66	

*** $p < .01$

親しみを感じず、ほとんど無関心なのである。なかにはカトリックに対して強い憎しみと反感を述べる人もいた。

おそらく日本に在住中は行っていたであろうお盆やお彼岸などの行事をブラジル移住後にどの程度行っているかを聞いたQ14の回答結果を示す。評定点の平均と標準偏差とを示したものが表22である。表22に基づく分散分析表が表23である。

分散分析の結果、宗教要因の主効果 ($F=4.67$, $df=3/64$, $p<.01$) にのみ有意な差が認められた。

宗教要因の主効果は、男女を込みにして、宗教の違いによりお盆やお彼岸などの行事を行う程度に違いがあることを示している。平均評定点は、佛教、新興宗教、カトリック、そしてプロテスタントでそれぞれ、3.90, 4.43, 3.69, そして2.60である。佛教と新興宗教の間 ($F<1$, $n.s.$), 佛教とカトリックの間 ($F<1$, $n.s.$), そして新興宗教とカトリックの間 ($F=1$, $n.s.$) には有意差が認められなかったけれども、佛教とプロテスタントの間 ($F=8.3$, $df=1/64$, $p<.01$), 新興宗教とプロテスタントの間 ($F=8.3$, $df=1/64$, $p<.01$), そしてカトリックとプロテスタントの間 ($F=4.1$, $df=1/64$, $p<.01$) にそれぞれ有意差が認められた。

この結果は、プロテスタントの信者がお盆やお彼岸などの行事をあまりしないけれども、他の人々がかなりするということを示している。

ここでは宗教にかゝる質問の回答結果を簡単に整理してみよう。

戦後日系移民の宗教分布は、やはり佛教徒がもっとも多く、全体の54.8% (46名/84名) と過半数を占めており、次いで多いのがカトリック教徒の15.5% (13名/84名) であり、さらにプロテスタント教徒の11.9% (10名/84名), 日本の新興宗教の9.5% (8名/84名) の順である (表11参照)。

ブラジル移民の佛教徒は、佛教や佛典についての知識に乏しく、熱心な信者とはいえず、カトリック (キリスト) 教に対して関心がないにもかかわらず、平気でキリスト教の教会で結婚式を挙げ、お盆やお彼岸などの行事だけはかなり熱心に行うという特徴を示している。この傾向は、日本在住の多く

の佛教徒の傾向とたいへんよく類似している。

これに対して、日系移民のカトリック教徒は、カトリックに対する知識は佛教徒の佛教についての知識よりも深く、熱心な信者であり、教会へも通うけれども、お盆やお彼岸などの行事もかなた熱心に行っているのである。

日系移民のプロテスタント教徒は、カトリック教徒ほど目立った傾向を示していないけれども、カトリック教徒と違いお盆やお彼岸などの行事をあまり行わないということが特徴である。

ブラジルへ移住後、30年間位の生活のあいだに困ったことがあったかという質問であるQ15の回答結果を示す。評定点の平均と標準偏差とを示したのが表24である。表24に基づく分散分析表が表25である。

表24 ブラジルでの生活で困ったことがあったか否か（Q15）

		佛 教	新 興 宗 教 (日 本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	22 [*]	4	7	4 ^{***}	37
	平 均	5.05	5.25	4.71	4.00	4.89
	標準偏差	1.36	0.50	1.60	2.16	1.43
女 性	人 数	22 [*]	4	6	6	38
	平 均	4.73	5.50	5.67	5.33	5.05
	標準偏差	1.70	0.58	0.82	0.82	1.41
計	人 数	44	8	13	10	75
	平 均	4.89	5.38	5.15	4.80	4.97
	標準偏差	1.53	0.52	1.34	1.55	1.41

注：7段階評定尺度，点数が高いほど困った程度が高い。7（困ったことばかり）
－1（全然困ったことがない）。

※ 無回答者1名を除く。

表25 表24に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A (性 別)	3.74	1	3.74	1.83
B (宗教別)	3.61	3	1.20	<1
A×B	4.93	3	1.64	<1
誤 差	137.15	67	2.05	

分散分析の結果、すべての要因に統計的に有意な差は認められなかった。全体の平均評点得点は4.97であり、性差や宗教の違いに関係なく、戦後移民は、全体として考えれば、“少し困ったことがあった”というところへ落ち着くのである。

表26 ブラジルでの生活で困ったことの内容（Q15-1）

		佛 教	新 興 宗 教 (日 本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	17	4	4	2	27
	(1)言 語	6(54.5)	2(100)	—	1(100)	9(52.9)
	(2)金 銭	3(27.3)	—	2(66.7)	—	5(29.4)
	(3)病 気	1(9.1)	—	1(33.3)	—	2(11.8)
	(4)習 慣	1(9.1)	—	—	—	1(5.9)
	(5)そ の 他	—	—	—	—	—
	内 容 頻 数	11(100)	2(100)	3(100)	1(100)	17(100)
	無回答者数	9	2	1	1	13
女 性	人 数	17	4	6	5	32
	(1)言 語	10(58.8)	2(50)	1(20)	2(66.7)	15(51.7)
	(2)金 銭	4(23.5)	—	1(20)	1(33.3)	6(20.7)
	(3)病 気	1(5.9)	1(25)	1(20)	—	3(10.3)
	(4)習 慣	2(11.8)	—	2(40)	—	4(13.8)
	(5)そ の 他	—	1(25)	—	—	1(3.4)
	内 容 頻 数	17(100)	4(100)	5(100)	3(100)	29(100)
	無回答者数	5	0	2	2	9
計	人 数	34	8	10	7	59
	(1)言 語	16(57.1)	4(66.7)	1(12.5)	3(75)	24(52.2)
	(2)金 銭	7(25.0)	—	3(37.5)	1(25)	11(23.9)
	(3)病 気	2(7.1)	1(16.7)	2(25.0)	—	5(10.9)
	(4)習 慣	3(10.7)	—	2(25.0)	—	5(10.9)
	(5)そ の 他	—	1(16.7)	—	—	1(2.2)
	内 容 頻 数	28(100)	6(100)	8(100)	4(100)	46(100)
	無回答者数	14	2	3	3	22

注：人数はQで7, 6, 5 を選択した人の数。無回答者数は、前記を選択したにも係わらず、内容を記入していない人の数であり、人数から無回答者数を引いた数が内容を記入した人の数になる。一人の人が二つ以上の内容を記入している場合があるので、内容頻数は内容回答者数より多くなる場合がある。（ ）内の数は、性別・宗教別の頻数に対する%

それでは、困ったことは、具体的にどのようなことだったのだろうか。Q 15-1の回答結果を整理したのが表26である。

ブラジルでの生活で困ったことの内容は、男性と女性とでほとんど類似しており、もっとも困ったのがポルトガル語であり、全体で52.2%を占めている。これは、Q 6の結果と対応している。すなわち、戦後移民がブラジルへ初めて来た時、ポルトガル語をほとんど話せなかったのである（表8, 9, 10参照）。彼らは、ブラジルへ移住後も仕事に精を出さざるを得ないので、言葉を勉強する時間がとれないのである。必然的にポルトガル語は上達せず、現在も不自由している人が多い。子供が成人してからは、通訳を子供にしてもらという人も少なくないのである。

言語の次が“金銭・経済的問題”である。これは言語の約半数の23.9%である。日本で経済的に裕福だった人は少なく、また日本での生活に困らなかった人でも、異郷の地では経済的に不自由になりやすいのである。

次いで、病気と習慣のそれぞれ10.9%ずつである。金銭、病気、そして習慣は、結局言葉の問題に帰着するとも言える。言葉は文化のサインだからである。たとえば、入院しても自分の病状を医者へ伝えられないとなるともうお手あげである。

戦後日系移民は、性差や宗教にかかわらずなく、ポルトガル語に苦労したのである。カトリック教に入信した人も例外ではないのである。

それでは、現在、移民はブラジルでの生活に慣れたのであろうか。Q16の回答結果を示す。評定点の性別と宗教別の平均と標準偏差とを示したのが表27である。表27に基づく分散分析表が表28である。

分散分析の結果、表28に示すように、全ての要因に統計的に有意な差は認められなかった。性別に関係なく、また宗教の違いにも関係なく、戦後移民の人々は、移住後30年経過した現在、ブラジルでの生活に同程度慣れたことを示している。全体の評定平均点は5.64であり、“かなり慣れている”と“すこし慣れている”の中間位であるが、どちらかといえば“かなり慣れている”方向へよっている。

表27 性別と宗教別のブラジルでの生活に慣れた程度（Q16）

		佛 教	新興宗教 (日 本)	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	21*	4	7	4	36
	平 均	5.62	5.75	5.86	6.25	5.75
	標準偏差	0.97	0.50	1.46	0.96	1.02
女 性	人 数	22**	4	6	6	38
	平 均	5.41	5.50	5.67	5.83	5.53
	標準偏差	1.44	1.29	1.03	0.41	1.22
計	人 数	43	8	13	10	74
	平 均	5.51	5.68	5.77	6.00	5.64
	標準偏差	1.22	0.92	1.24	0.67	1.13

注：7段階評定尺度，点数が高いほど生活に慣れている程度が高い。7（完全に慣れている）－1（まったく慣れていない）。

※ 無回答者2名を除く。

** 無回答者1名を除く。

表28 表27に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A（性 別）	0.87	1	0.87	<1
B（宗教別）	1.87	3	0.62	<1
A×B	0.10	3	0.03	<1
誤 差	89.79	66	1.36	

ポルトガル語がほとんどはなせないまゝでブラジルへ入国して約30年間経過した戦後移民の人々は，様々な苦労を経た現在，それなりにブラジルでの生活に慣れたと思っているのである。否，そう思わねば救いがないのであろう。カトリック文化に適応した人もいれば，不適応なまゝの人もいるであろうが，適応の程度は別にして，住めば都なのであろう。

最後に，ブラジル社会の生活習慣をどう思っているかというQ17の回答結果をみてみよう。親しみを感じるか 反感をもっているかという次元での評定点の性別と宗教別の平均と標準偏差とを示したのが表29である。

表29 性別と宗教別のブラジル社会の生活習慣に親しみをもつ程度（Q17）

		佛 教	新興宗教 （日本）	カトリック	プロテスタント	計
男 性	人 数	22*	4	7	4	37
	平 均	5.64	6.25	5.86	5.25	5.70
	標準偏差	1.05	0.50	0.90	1.50	1.02
女 性	人 数	21*	4	6	6	37
	平 均	4.62	6.00	5.50	5.17	5.00
	標準偏差	1.63	0.82	1.05	1.33	1.47
計	人 数	43	8	13	10	74
	平 均	5.14	6.13	5.69	5.20	5.35
	標準偏差	1.44	0.64	0.95	1.32	1.31

注：7段階評定尺度，点数が高いほど生活習慣に親しみをもっている程度が強い。

7（完全に親しみをもっている）－1（完全な反感をもっている）。

※ 無回答者1名を除く。

※※ 無回答者2名を除く。

表30 表29に基づく分散分析表

	SS	df	MS	F
A（性 別）	2.22	1	2.22	1.40
B（宗教別）	7.74	3	2.58	1.63
A×B	1.54	3	0.51	<1
誤 差	104.73	66	1.59	

分散分析の結果，表30に示すように，すべての要因に統計的に有意な差が認められなかった。性別や宗教別に関係なく，彼らは，ブラジル社会の生活習慣に親しみをもっているのである。全体の評定平均値は5.35であり，“かなり親しみをもっている”というより，“すこし親しみをもっている”方向に寄っている。

統計的な有意差は認められなかったものの，平均値を子細に点検すれば，数値のうえでは，男性の方が女性よりも親しみの程度が高く（男性の平均点5.70＞女性の平均点5.00），宗教別では，新興宗教（平均点6.13）＞カトリック（平均点5.69）＞プロテスタント（平均点5.20）＞佛教（平均点5.14）で

あり、新興宗教徒とカトリック教徒とがプロテスタント教徒と佛教徒よりも、より親しみをもっているのである。

2-3 考 察

結果の所ですでに述べたけれども、ここでもう一度本調査結果の梗概を述べておこう。

調査対象者である戦後移民は、現在年齢は平均的に50歳代後半から60歳代前半の人々が中心であり、ブラジル在住期間は平均でほぼ30年位であり、職業は農民と主婦の肉体労働者が多数を占めており、ブラジルへ初めて来た時はポルトガル語をほとんど話せなかったけれども、地方により話せなかった程度に違いが認められ、イボチ>ポルト・アレグレ>バジェの順で話せない程度がよりひどくなることを示していた。

戦後移民の宗教分布は、やはり佛教徒がもっとも多く、全体の54.8% (46名/84名)と過半数を占めており、次いでカトリック教徒の15.5% (13名/84名)であり、さらに、プロテスタント教徒の11.9% (10名/84名)、そして日本の新興宗教の9.5% (8名/84名)の順に続いている(表11)。

佛教徒は、佛教や佛典についての知識に乏しく、熱心な信者とはいえず、カトリックに対して関心がないにもかかわらず、平気でキリスト教の教会で結婚式を挙げ、お盆やお彼岸などの行事だけは熱心に行うという特徴である。この傾向は、日本在住の多くの佛教徒の傾向と大変より似ており、日本での“家”宗教としての佛教の姿をそのまま継承していた。

これに対して、カトリック教徒は、カトリック教に対する知識は深く、熱心な信者であり、教会へも通うけれども、お盆やお彼岸などの行事もかなり熱心に行っているのである。

プロテスタント教徒は、特別目立った特徴は認められないけれども、お盆やお彼岸などの行事をあまり行わないということが特徴である。

彼らは、宗教と性との違いにかかわりなく、ブラジル在住30年間に困ったことがあり、もっとも困ったのがポルトガル語である。次いで、金銭、病氣、

そして習慣の順になっている。ブラジル移住後は、家族を養うために仕事に精を出さざるをえないので、ポルトガル語を勉強する時間がとれない故にポルトガル語は上達せず、現在も不自由な人が結構多いのである。

ブラジルへ移住してすでに約30年経過した戦後移民の人々は、ブラジルのカトリック文化やブラジルでの生活にどのように適応していったのであろうか。

宗教的側面からそれを検討するのが、この小論の目的である。

基本的仮定として、移住後カトリックに入信した人が、佛教徒のまゝの人よりもブラジル社会によりよく適応しているという仮定である。

カトリック文化が深く浸透しているブラジル社会では、社会に適応し、同化していくためには、カトリック教に入信することが一番手っ取り早い方法ではなかろうか。

カトリック教徒が15.5%という割合は、カトリック教徒が多いのか少ないのかは、簡単には判断できない。

日本国内のカトリック教徒の信者数を正確に把握することは難しい。文化庁などの統計資料では、種々の宗教法人の信者数を合計すると日本の人口総数を上回る場合が多いからである。文化庁等の統計資料にあるカトリック教徒の信者数は、70万人前後であり、いくら多く見積もっても100万人を越えることはないであろう。これに比べれば、15.5%という割合は、日本国内のカトリック信者数の人口比よりもはるかに多いと推定される。

ただし、カトリック教に入信した日系移民の方が、入信しなかった日系移民よりもブラジル社会により適応しているとは、本調査結果だけでは言えない。なぜなら、ブラジルでの生活に慣れた程度を聞いたQ16（表27,28参照）の結果、全ての要因に統計的な有意差が認められず、日系移民はすべてかなり慣れていると回答しているからである。また、ブラジル社会の生活習慣に親しみを感ずるか否かを聞いたQ17（表29,30参照）の結果、全ての要因に有意な差が認められず、親しみをもちっていると全員が答えていたからである。

ブラジルへ移住して30年位たった現在では、信じる宗教に関係なく、“住めば都”という気持ちをすべての移民がもっている。しかも過去の苦勞も、宗教の違いに関係なく、同じ程度にしているし（表24, 25参照），その内容もほぼ同じである（表26参照）。ただし，表26を子細に検討すれば，カトリック教徒の困ったことの内容は，他の宗教の人々と比較して，言語の苦勞の割合が少なく，金銭等の苦勞の割合が多くなっている。

戦後移民の人々は，ポルトガル語をほとんどしゃべれずにブラジルの土を踏み，それぞれ非常な苦勞を経て，現在では，それぞれブラジルの生活にも慣れ，ブラジル社会の生活習慣にもそれなりの親しみを感じているのである。

宗教的には，日本で信じていた佛教と新興宗教とをそのまま信じている人々の割合が7割弱であり，カトリック教に入信した人々も含めて，お盆やお彼岸などの行事を割合熱心に行っているのである。日本での祖先崇拝的慣習をブラジルでも維持している人々が圧倒的に多いのである。

ここで，ブラジルでカトリック教に入信した人々の動機を若干考えてみよう。カトリックの女性2名は，ブラジルでカトリック教徒入植地に住んだ経験があり，カトリックの慣行を知らないので大変な苦勞をした。その結果，カトリック教に入信したと述べていた。まさに，ブラジル社会に適應するためにカトリック教徒になったのである。また，カトリックの男性4名は，日系人のカトリック教徒に非常に強く勧められた結果，ブラジル社会で生きて行くには，その方がよいと思い入信したと動機を語っていた。このように，カトリック教に入信した人々は，ブラジル社会への適應のためにカトリック教徒になったのである。すでに述べたように，カトリックに入信した人々の方が，他の宗教の人々よりも，よりよくブラジル社会に適應しているかどうかは，本調査結果だけからは明確ではない。

これらの調査結果の多くは，森口教授の体験談を裏付けるものである。

3. 結びにかえて ―日本人コロニーの人々―

ポルト・アレグレの日系移民の人々は、分散して住んでいたが、イボチとバジェの人々はそれぞれ同じ地域に集まって居住していた。

ここでイボチとバジェの日本人コロニーの人々の特徴について簡単に述べることにする。

ポルト・アレグレからバジェへJICAの援助による診療車（写真1参照）で移動した。

パンパの大草原の真只中を走る。途中、方々に放牧された牛の姿が見える（写真2参照）。ブラジルは雄大である（写真3参照）。写真3は、トルー



写真1 JICAの援助により作られた診療車

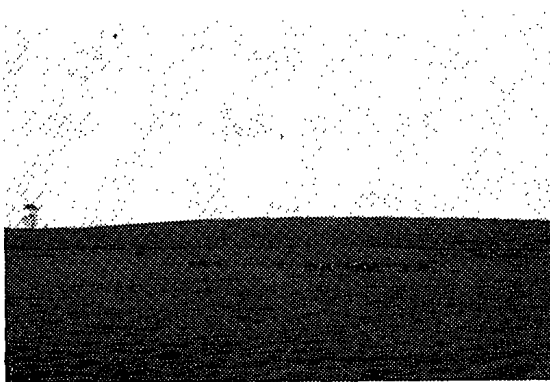


写真2 パンパ大草原での牛の放牧



写真3 世界一のイグアスの滝

マン大統領夫人が“おゝかわいそうなナイアガラよ”と嘆いたと伝えられるイグアスの滝である。さて、パンパ大草原の道の両側には結構樹木が多く、土は赤土である。

バジェには15家族の日本人が、郊外の農地に固まって居住しているが、11家族の家では、誰かが日本に出稼ぎに行っているという。野菜の価格が下落したので、日本への出稼ぎの方が金になるということであった。ブラジルに残っている人々は、経済的に困らない人々であった。

バジェの日本人コロニーの人々は、すべて長崎県壱岐島出身であり、ブラジルに残っている6町歩の農園をもつA氏（写真4参照）の話を聞く。父親は漁師で、17歳の時にブラジルに移住した。夫人は10歳の時からブラジルに移住したという。親の代は父親が恐くて母親にしか相談できなかったが、自分達の子供は逆で、15歳の娘が車でバジェ市内へ行きたいと言ったら、私（父親）はウンと言うが、母親は車で送り迎えして監視していると言う。現在は、家を建て、新車を買って、テレビも買ったので十分満足ですと言っていたが、今でも6町歩の広い農地を一家で経営するのは楽ではなく、日の出から日の入りまで目一杯働いてやっとですとも言っていた。果樹園の方が楽なので、今後、農地の半分を果樹園に変える予定ですと夫人が言っていた。子供に教育をつけるのがやっとなで、夫婦の文化的な生活まで手が届かないとのことであった。バジェはブラジルの肉の本場なので、よい肉が安く手に入るのので肉食中心になるとのこと。野菜を作っているが、売り物で、あまり野菜は食べないという話だった。ちなみに、牛肉と鶏肉はともに1kg40円である。

農園と八百屋の両方を経営するS氏（写真8参照）にもいろいろ伺う。S氏の農園では、ブラジル産ブドウと桃を、野菜以外に作っている。S氏は5町歩の農園と繁盛している八百屋を営んでいる。農繁期には、4人の人夫をやとうが、半分は自然にまかすという。卸すと半値、自分の店で売ると倍で売れる。強い農薬は使わず、女中菊などで作った農薬を使っている。母子家庭（父が招集で南方の戦地で戦死）で育ち、日本では腕のいい大工だったが、牧場主になりたいという夢をもってブラジルへ来た。ブラジルでは牛は

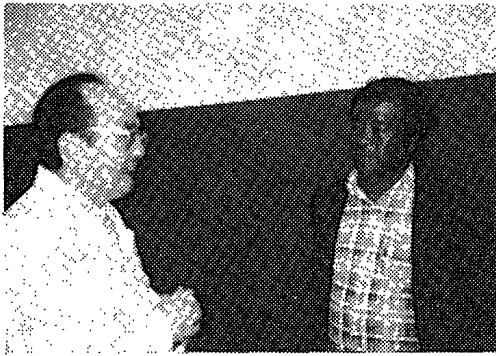


写真4 森口教授（左）と
パジェの農民A氏



写真5 森口教授と
パジェの日系の人々

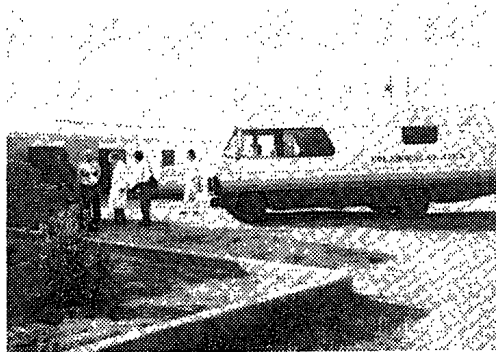


写真6 A氏宅前



写真7 パジェの日本人農園

自然放牧，豚は半分人間が見なければいけないので少ない。パジェ周辺はポルトガル系の人が多く，手間のかからない牛の放牧が多い。1ヘクタール半から2ヘクタールに牛一頭を入れている。多くは3年間は放っておいて，それから売ることが多い。

農作物は，ドイツ系の人々が米と小麦を作っているおり，牛乳の生産もドイツ系の人達が行っている。

S氏は，戦後第2回目の渡航者の話を聞いて，最初単独で来るつもりがやはり彼らと一緒に事業団の関係で来た。三重県で一週間の講習を受けて，船賃は10年後払いということでブラジルへ来たが結局は支払っていない。2年間契約の農業労働者としてブラジルへ渡り，2年間働いたが，第2回目の渡航者に結局だまされてただ働きだった。2年後借地0から始め，10年後に現在の土地を買った。事業団から12%の融資を受け，インフレで返済が大いに助かった。100で買ったのが10になる。当時のパジェは，1年間で殺人事件

は1件もなかった。現在も田舎だから治安がいい。バジェは最低賃金が安すぎる。現在、店2人、農場2人の計4人分の賃金を支払っている。

S氏によれば、バジェで日系農業移民は、第三市民言われている。ポルトガル語が十分にできず、日本人だけで同じような地域に住み、文化レベルも低いからと言う。

またS氏によれば、日本人4家族がバジェに入植して果物を始めて植えた。それまで、バジェではオレンジ以外ほとんどなかった。ブドウ、桃、ミカンも最初に植えた。S氏の祖父は、日露戦争時に203高地で戦死した。父親も第二次世界大戦中にニューギニアで戦死した。ブラジルでは、トラック輸送は、貨車の10倍の費用がかかるので、もっと鉄道を発展させれば経済が発展するだろうというS氏の考えだった。

S氏によれば、小学校の先生はまともな教育をしない。中流以上のブラジル人は日本人をよく思わない。バジェの人々は特にそうである。バジェへ来

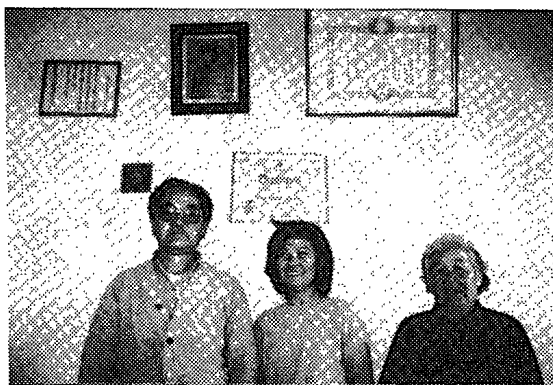


写真8 S氏夫婦とS氏の母堂

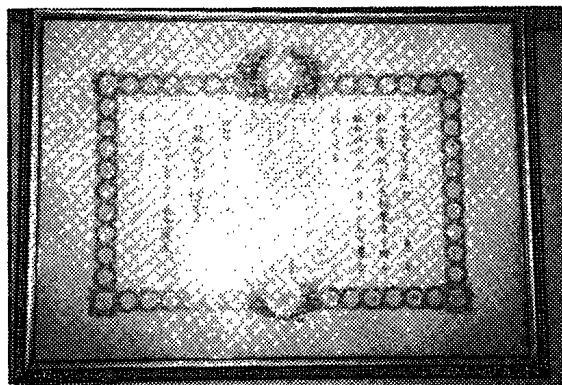


写真9 S氏の祖父の賞状



写真10 S氏の祖父の写真

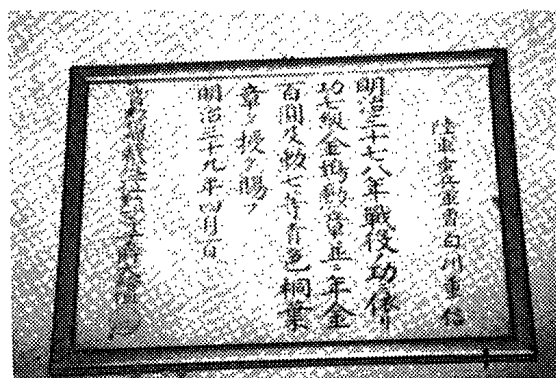


写真11 S氏の父の賞状

た頃、上から下までジロジロ見て、ジャポネといって軽視されたそうである。

次にイボチの日本人コロニーについて述べる。イボチの日本人の学歴は、森口教授の言った通りであり、森口教授の言う戦後移民はイボチの人々を主に言っていたのである。イボチは、事業団が土地代を貸してくれただけで、測量、分譲から道路作りまで全て入植者が行った。日本政府と入植者の負担は半々であるというのがイボチの日系人の人々の言い分である。イボチは、約50家族住み、ブドウ園を主体に経営している。イボチの移民一世はポルトガル語が不自由であり、二世は不自由しない。二世の配偶者の60%位はブラジル人である。ここでは、日本の農村で見られるような後継者不足はない。さらに嫁不足もない。ブラジル女性からみれば、日本人の夫は、妻を大切にするので、農家でも喜んで嫁にくるということである。ただしイボチは、経済的に非常に恵まれている。収穫の良さは抜群である。イボチから日本への出稼ぎに行く人は少なく、行く人はあっても農閑期の2、3ヶ月だけで帰ってくるということであった。

引用文献

前山 隆 1984 ブラジル日系人におけるエスニシティーとアイデンティティー——認識的・政治的現象として——。民族学研究，第48巻4号，444-458。

島 久洋 1991 教祖は非業の死を遂げる——ブラジル宗教事情——。桃山学院大学・キリスト教論集，第27号，63-81。

富野幹雄・住田育法 1990 ブラジル——その歴史と経済——。啓文社

戰後巴西移民的宗教意識

概 要

島 久 洋

這是第二次世界大戰以後，移住巴西的日裔移民的宗教意識的調查報告。他們的居住地是，巴西最南端的 Rio Grande do Sul 州 內的 Bagé ,Ivoti, Pôrto Alegre 三處。

調查對象是男性44名和女性45名，計89名。他們的年齡以50歲代後半至60歲代前半為中心，居住巴西的期間大約30年，大多是以農為業，初到巴西時都不懂葡萄牙語。

調查時期是1990年 8 月 2 日至14日之間。

戰後移民的宗教分布，以佛教為最多，佔回答者84名之中的54.8%（46名），其次是天主教的15.5%（13名），再次是新教徒的11.9%（10名），與日本的新興宗教的 9.5%（8名），其他的 2.4%（2名），無宗教者的 6.0%（5名）。

巴西移民的佛教徒對於佛教和佛經的知識極其缺乏，說不上是熱心的信徒。他們所顯示的特徵是，對於天主教雖然毫無關心，却坦然地在基督教會舉行結婚儀式，而且只是熱心地從事盂蘭盆以及彼岸等々佛事。這種傾向與居住日本的衆多佛教徒極其相似。

日裔移民的天主教徒都是熱心的信徒，也上教堂，但是對於盂蘭盆以及彼岸等儀式也頗為熱心。

新教徒不太參與盂蘭盆以及彼岸等々儀式、實是一件值得注目的事情。關於對巴西的社會習慣有無親密感或是有所反感的質問所作的回答結果，雖然不同宗教與性別在統計上，並看不出有意的差別，但是就得分的方向來說，可以看出，對於巴西的社會習慣，男性遠較女性，新興宗教與天主教的信徒比新教徒或是佛教徒，更有一番親密感。居住巴西30年後的今天，宗派上的不同或是性別並無重大的關涉，他們都同一程度地習慣於巴西的生活，並且令人感到他們相當習慣。

至於因為信仰天主教而更為習慣於巴西的生活與否，只從這篇報告的資料並不明確。

Religious Consciousness of Japanese Emigrants to Brazil after World War II

Hisahiro SHIMA

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate religious consciousness of Japanese emigrants to Brazil after World War II.

In August 1990 a study was made of 89 males and females aged 34–79 living in Bagé, Ivoti, and Pôrto Alegre in the province of Rio Grande do Sul in the Federal Republic of Brazil.

The questionnaire consisted of 72 items concerning health, eating habits, family relations and old age as well as religious behavior. Both questionnaire and interview were conducted in Japanese.

The religious distribution of Japanese emigrants are presented in Table 1.

TABLE 1 Religious Distribution of Japanese Emigrants in Brazil

Religion	Male		Female		Total	
	Number	%	Number	%	Number	%
Buddhism	23	52.3	23	51.1	46	51.7
New Religion (JAPAN)	4	9.1	4	8.9	8	9.0
Católica	7	15.9	6	13.3	13	14.6
Protestante	4	9.1	6	13.3	10	11.2
Others	0	0	2	4.4	2	2.2
Without Religion	4	9.1	1	2.2	5	5.6
N. A.	2	4.5	3	6.7	5	5.6
Total	44	100	45	100	89	100

We found Japanese emigrants to be accepting of and positive toward customs of Brazil. The significant of these results was discussed.